

軍師・参謀を志す人のために

「軍師・参謀」に向けた次の段階へ

2010冬 増刊号

「軍師・参謀」に向けた次の段階へ

1. この小冊子の内容
2. 策の断行とその条件
3. 策謀を実行するにあたっての留意点
4. 策を進言した者の身に迫る危険
5. 「軍師・参謀」となるための自己の演出
6. 「軍師・参謀」らしさを示すための自己演出
7. 能力を示し評価されることの代償
8. 次の段階へ向けて人材を組織化する
— 個人戦から自分のための組織の形成へ—

この小冊子の内容

◆ 第16巻で検討したこと

この小冊子シリーズでは、第7巻から第13巻までは人物の能力や人材確保等につまわる課題を、また、第14巻以降は指導者（リーダー）の権力確立やその維持に関する課題について、それぞれ検討を行ってきました。

そして第16巻「指導者に挑戦する力を持つ者の処遇」では、指導者の権威に挑戦してその指導者の権力を奪い取ってしまうことができるほどの実力を持っている人物を、組織内でどのように処遇するべきなのかという課題について、歴史上の事例をいくつか概観しつつ検討しました。またそれに併せて、こうした課題を解決するための策を指導者に進言する「軍師・参謀」

も、献策するにあたって、自分の運命を左右するほどの大きな課題に直面することがあるかもしれない、という点について検討しました。

これまでこの小冊子シリーズでは、上記のことも含めて、指導者や指導者が率いている組織が抱えている課題を解決するために「軍師・参謀」役の者が何か計略を謀ろうとするとときに、その「軍師・参謀」自身に対応が求められる可能性のある課題をいくつか掲げてきています。

◆ この小冊子の内容

この巻は、小冊子シリーズ「軍師・参謀を志す人のために」の増刊号です。この巻では、これまでシリーズ各巻にていくつか掲げてきた「軍師・参謀」自身にとっての課題のうち、特に策の立案遂行に迷いを持つことや、自分の姿を演出することに関する検討の成果を補足しています。併せて、「軍師・参謀」となることを志している若い読者の皆さんがこうした課題にどのように対応していくのかを考える手がかりとなると思われるものを提示してみました。さらに、皆さんそれぞれが思い描いている「軍師・参謀」になるという目標に向けて、その準備段階である今から心得ておきたいことなどについても、若干の検討を試みています。

この増刊号が、シリーズ各巻をご覧になってきた読者のかたがたにとって、自分の理想とする「軍師・参謀」となるための“準備”や“心づもり”に少しでも役立てば幸いです。

策の断行とその条件

◆ 第16巻で掲げたこと

この小冊子シリーズ第16巻では、次のような一文を掲げていました。

「軍師・参謀」（である読者の皆さん）が冷徹に状況を分析した結果、自分の策の「正しさ」に絶対の自信があるのであれば、その実施をためらわず、「軍師・参謀」という仕事の実践に思い切って挑戦していただきたい（カッコ内は読みやすくするために付加したもの）

これは、皆さんが「軍師・参謀」として指導者（リーダー）を支えて、その指導者のために策謀を立案進言したり、計略の遂行を^{さいはい}采配したりという役割を果たすにあたり、迷いを持つことなく自信を持って自分に課された任に当たっていただきたいとの趣旨を述べているものです。*1

◆ 策の実行を、ためらわない

ここからはしばらく、今述べた「計略の立案進言やその遂行にあたり、迷いをもたない」ということについて、あらためて、いろいろな角度から考えてみたいと思います。手始めに、第16巻に次のような記述があったことを思い出してください。

私たちは、^{しばせん}司馬遷が「^{しき}史記」の中で引用している、「ものごとを決めるべきその時に決断ができなければ、やがて（天の^{とが}咎めを受けて）自己の滅亡を迎えることとなる」

*1：もちろんこれには、実現しようとしている目標の「正しさ」の吟味^{ぎんみ}がきちんと行われているという前提が置かれています。

という言葉も、常に心に留めておく必要があるのではないかと思います。

上記で司馬遷が引用している一文は、「史記」の「^{せいとうけい}齊悼惠王世家」に掲げられているものです。この、断行するべき時にそれをしないと ^{わざわい}禍 を受けるというくだりは、^{しょうへい}召平という人が死を前にして、当時の道家*2 の言葉を用いて後悔の念を述べたものとされています。

司馬遷が悼惠王の世家の中で記録を残したこの召平という人物は、対抗勢力の不穏な動きをいったんは察知するくらいの能力があったにもかかわらず、^{たく}巧みに ^{あざむ}欺かれてしまい、その後は追い詰められ、ついにはみずから命を断たなければならなくなるという運命をたどります。

何かを行動に移すべき場面にあって、迷いやためらいを ^{いだ}抱けば失敗を招くというのは、当たり前すぎることであり、だれもがよくわかっているもののように思われます。しかし、この召平はそれがわかっていながら、できなかったようです。

もちろんこの小冊子の制作者は、「軍師・参謀」となることを志すほどの読者の皆さんが、おのれの能力に自信が持てず優柔不断な迷いを抱く凡人であるなどとは考えていません。「軍師・参謀」的な高い能力を持つ読者のかたがたであれば、最良の策を立案し、指導者に適切に進言して、その実行に際しても無用なためらいを持つことは決してないでしょう。

しかし、時としてそんな“高い能力”が、かえって落とし穴を掘る場合があるということも自覚しておいていただければと思うのです。

* 2 : ^{ろうし}老子や ^{そうし}荘子の唱えた説を継承した考え方を持つ学者たちの総称。